

この日々は当たり前ではない

西陵中学校 一年 水町 日乃花

私は、この日々が当たり前だと思っっている人へ伝えたいことがある。それは、この日々は絶対に当たり前ではない、ということである。

今から、ちょうど七十五年前、この鹿児島は戦争の真ただ中であつた。食べられる物も少なく、いつ空襲が来て死ぬかわからない、まさに、「死と隣り合わせ」という状況だつた。そんな中を、私たちの先人達は必死に生き延びていたのだ。その時の先人達は、戦いのない平和な日々をどれほど望んでいただろうか。たくさんのご飯を食べられて、安心して眠れて、友人や家族と楽しく談笑する。きっと先人達が望んでいたであろうこんなことを、私たちは当たり前のようにしているのだ。長い悲惨な時を経て、ようやくたどり着いたこの日々を私たちは当たり前だと思っっている。私は、それは絶対におかしいことだと思う。

では、この日々を大切に残していくには、どうすればよいのだろうか。私は、三つの案を考えてみた。

一つ目は、戦争を体験された人々の話を語り継ぐ、ということだ。当時、戦争を体験された人しか感じることでできない感情は、写真には残らない。それに、写真やデータからでは伝わってこないことも、人の感情のこもった言葉からは、実感をもって伝わってくることも多くある。もちろん、写真やデータも大切だけれど、体験された人の話を語り継いでいくことは、戦争を映像の中の昔話にしないために必要だと思う。

二つ目は、「終戦の日」などの節目を大切にすると、ということだ。終戦の日などには式典が行われる。私は、それをきっかけにして、たくさんの人が戦争についてもう一度深く考える機会になると思う。

そしてさらに、「戦争は絶対に繰り返してはいけない。」と人々に改めて感じさせることができると思う。

三つ目は、一人ひとりが、この日常が当たり前ではないということとを常に意識する、ということだ。戦争という長い悲惨な時を経て、ようやくたどり着けたこの日々は、当たり前ではない。これを一人ひとりが意識して、これからの日々を過ごしていくべきだと思う。

私は、自分が当たり前のように過ごしているこの日々は、絶対に当たり前ではないと思っっている。私たち日本人は、特にそのことをきちんと考えていかなければならない。あの時、日本で、遠くの島で、敵国で、血を流し、祖国のために戦った先人達がいたことを覚えておかなければならない。そして、日本と戦った敵国にも様々な犠牲者がいたことを、理解し、知らなければならぬ。どの人たちにも大切な人がおり、その大切な人たちも悲しみ、苦しんだことを想像しなければならぬ。その全ての人たちの犠牲を経て、ようやくたどり着けたこの日々は、永遠に残していかなければならないのだ。

今まさに、戦争体験者が高齢化し、実際に体験談を聞く機会が減っている。ナガサキの日もヒロシマの日も知らない若者がいる。だからこそ、私は、私の考えた三つの案を私自身が意識して生きていこうと思う。そして、みんなにもそうしてほしい。当たり前ではないこの日々を永遠に残していくために。